

会話がうまくできないのは 認知症の症状？

Q 母が言葉を思い出せないことが増えました。認知症の症状でしょうか。

A 言葉のやり取りが難しくなる

「失語」の症状かもしれません。

長 く言葉に詰まった

り、「あれ」や「それ」が多くなったり、言ったことが正しく伝わらないことが増えているのであれば、原因の一つとして認知症の「失語」という症状が疑われます。

失語は、脳の「聞く」「話す」「書く」「読む」といっ

た機能が低下する症状で、大きく運動性失語と感覚性失語に分けられます。

運動性失語では、聞いた話を理解することはできるものの、自分が話そうとすると言葉がうまく思い浮かばなくなったり、言い間違いが増えたり、文字をすらすらと書けな

くなったりします。

感覚性失語では、よどみなく話すことはできるものの、聞いた話を理解するのが難しくなります。意味のつながらない話をすることもあります。

アルツハイマー型の認知症では、運動性失語よりも先に、感覚性失語が起こります。このお母様の場合も、言葉に詰まる前に、周囲の人との会話がかみ合わないことが増えていたと思います。

例えば、「どこへ行っていたの？」と聞いたのに「元氣だよ」と返ってきたり、用事を頼んで「分かった」と言ったのに何もしてなかったり。「言った」「聞いていない」で周囲の人とトラブルになることも

あります。こうした症状が見られたら早めに診察を受けましょう。

もの忘れの症状よりも、言葉の意味や物の名前が分からなくなる症状が目立つ、意味性認知症という認知症もあります。

失 語が起きると、本人にとっては、言

いたいことを伝えられないもどかしさや苛立ちが募ります。それが続くと、次第に自分の気持ちを伝えることに対して消極的になつたりします。

そのため、周囲の人はコミュニケーションをあきらめず、本人の言葉が出てくるのをじっくりと待つ、話すときはゆっくりと、などを心がけるようにしましょう。

失語が起きた時の対応

認知症による失語では、本人の「話す意思」を尊重して接することが大切です。

ゆっくり話す

ゆっくりと、なるべく大きな声で、ハキハキと話しましょう。また単語で区切ると聞き取りやすくなります。

じっくり待つ

本人が言葉に詰まっても、待っていれば自力で話せる場合もあります。先回りしてすぐに話を引き取らないようにしましょう。

身振りを交える

身振り手振りやジェスチャーで言いたいことが伝わることや、本人が言葉を思い出すこともあります。



うら かみ かつや
指導 浦上克哉

鳥取大学医学部
認知症予防学講座・教授、
日本認知症予防学会理事